

# 令和五年度 書道講演会

令和5年11月20日  
於・国立新美術館  
3階講堂

## 「源氏物語と紫式部の書道観」

中央大学名誉教授  
公益財団法人五島美術館理事

池田和臣



池田 和臣氏

池田でございます。

『源氏物語』と書道の関係は——ほとんどが仮名ですが——というと、大体、話すことが同じになります。ですから、今日お話しすることも、既にあちらこちらで重なる内容、同じような話をしたこともありまして、雑誌などに文章として書いたものもあります。どこかで聞いたことがあると思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、ご寛容いただいで、復習していただきたいと思えます。

レジュメ(19ページから掲載)をご覧ください。今日はスクリーンを使いませぬ。古い資料が多いので、赤外線で見えないものが三、四点あります。大きくしても同じなのです。だから、無駄なのでやめました。レジュメの四枚、五枚目に出ている写真版を見ていただいて、最

後の図13、図14はここに持つてきていますので、実物を見ていただければいいだろうということにいたします。

初めのIから説明してまいります。IとII、要するに『源氏物語』についての基礎知識、それから仮名についての基礎知識についてある程度のことを実は話したいのです。それを前提にしてお話ししたいのですが、先ほど言いましたように時間が限られているので、それについては、今日は割愛します。申し訳ありませんが、そのような形で進めていきます。

簡単に触れます。まずIをご覧ください。1、2、3、4とあります。『源氏物語』は、紫式部が書きました。西暦で言いますと、一〇〇八年に成立したと、ものの本には書いてあります。でも、なぜそれが分かるのでしょうか。知識と

いうものは、得られた結果だけを暗記するのなら、受験生と同じでそれを見て覚えればいいわけですが、もう少し知識を深めようとしたら、なぜそれが分かるのかということまで下りていって、このような資料があるから分かるのだということ把握しないと本当の知識にはなりません。それが、先ほど言った基礎知識ということで、『源氏物語』を考えるのだったら、なぜ作者が紫式部だと分かるのか、なぜ成立年代が分かるのかということも知らなければいけません。しかしそれを今日話す時間がないので、残念ですが詳しくは話しませぬ。

ご存じの方は多いと思いますが、『紫式部日記』というものがあります。紫式部は作品を三つ残しています。『源氏物語』と『紫式部日記』と『紫式部家集』(個人歌集)です。後の二作

品から生い立ちなども分かり、『紫式部日記』に書いてある期日から、作者は紫式部であり、大体いつできたかということが分かるのです。

続いて「はじめの形態」「構成・主題」や「写本と本文系統」と書いてあります。われわれは、五十四巻、源氏物語五十四帖と言っています。平安時代の末期には、『源氏物語』は六十巻ありました。初めから五十四帖だったかどうか、実はよく分からないという話もしたいのですが、今日はいたしません。

写本や本文系統につきましては一言だけ触れておきますが、平安時代に書かれた『源氏物語』の本文は一行ありません。われわれが読むことのできる一番古いものは、藤原定家が書いた青表紙本の数帖だけです。国宝「源氏物語絵巻」がありますが、あれは絵巻なので、いわゆる文学の本文とは違います。省略したりしてありますから、いわゆる写本とは、われわれは考えません。そうすると、藤原定家ですから、鎌倉時代です。それも数帖しかありません。五十四帖がそろっているものは、鎌倉中期ぐらいの写本しかありません。だから、われわれは、実は、平安時代の『源氏物語』は読んでいないということです。

次にⅡ「仮名の成立史と文学史」です。皆さんは芸術的な書をお書きになるわけですが、平

安時代から書は芸術だったかというところ、「そうだ」と、私は言えません。半分はそうだったと思いますが、半分は、書かれたものを読む、記録して読むものであって、美しく書くだけのものではないわけです。文学写本というものは、鎌倉時代の写本から考えても、女手の散らし書きなどのような、連綿きれいに書いてあるような書き方は、恐らくしなかったらと思うます。書は文学との交流で成り立っています。書だけが独立した世界で、芸術的な書が初めからあって、皆がきれいに書こうとしていたわけではないのです。書というものがどのような環境で書かれていたのか、物語の写本も書くわけですから、そのような他の周囲のもの（文学）と書の関係を、本当は知らなければいけないと思っています。

Ⅱの1に書いてあります「仮名の成立」という大問題ですが、「書道史の教科書的通説は、国語国文学界の表記史研究によって補正されなければならぬ点がある」と書きました。国語学には、表記史という分野があります。仮名がどうやってできて、どうやって表記されていったかという研究が、古くから国語学の中にあり、そこをどんどん新しい成果が出ていますが、それが書道史に還元されていないという問題があります。

一番大きな問題だと思っていることは、草仮名の概念と位置づけです。私は、はっきり言って、草仮名はなかったと思っています。万葉仮名があります。万葉仮名は、漢字です。それを崩して草仮名になって、草仮名をもっと崩して、仮名になったのだ、女手になったのだという説明があります。間違いだと思っています。

草仮名資料の一番古いものとして、『有年申文』というものが必ず出てきます。あれをよく見てください。数行しかありませんが、ある文字は、万葉仮名で書いてあります。ある文字は、草仮名で書いてあります。ある文字は、仮名になってしまっています。「と」「や」「い」など、つまり画数の少ない字は、すぐに仮名になってしまっています。だから、草仮名ばかりで書いた資料は、本当は存在しないと思っています。つまり、草仮名というものを、仮名の変遷史上のある段階、変遷史上の概念と考えたら、それは間違いです。万葉仮名が全部草仮名になって、草仮名ばかりで書かれたものがたくさん残っていないければ、おかしいでしょう。草仮名ばかりで書かれたものは、『秋萩帖』ぐらいでしょう。あれは、わざと草仮名ばかりで、意図的に書いています。だから、古いものではないと、私は思っています。せいぜい、『源氏物語』の少し前ぐらいではない

でしょうか。

後で説明する『源氏物語』のある部分に、いろいろな書体が出てきますが、そこに草が出てきます。男手も出てきます。女手も出てきます。当然、真仮名すなわち万葉仮名も出てきます。だから、『源氏物語』の時代には、意図的にいろいろな書き方ができたのです。草仮名ばかりで書こうと思えば、「秋萩帖」のようなものは書けました。それは、仮名の歴史的変遷のある段階にあるのではなくて、意図的に書いたのです。一番初めの草仮名資料である「有年申文」の段階で、八七〇年ぐらいのとても古いものですが、その段階ですでに、万葉仮名もあるし、草仮名もあるし、もう平仮名体になってしまっているものもある、それらをごちゃ混ぜにして書いているのです。だから、草仮名ばかりで書いた歴史的段階は、私は存在しないと思っています。同じような問題が他にもあり、仮名の成立史の問題として話したいのですが、今日は時間がないので、やめておきます。

いきなり本題に入ります。Ⅲの『源氏物語』の仮名書芸論に入っていきます。初めに、仮名は「今の世」が絶頂と、紫式部は考えています。どこにそのようなことが書いてあるかというと、梅枝巻という巻にあります。光源氏の一人娘の明石姫君という人がいて、春宮

に入内する準備の場面が、梅枝巻に長々と書かれています。そこで、紫式部は、光源氏の口を借りて、仮名書芸について興味深い見解を披瀝しています。肝心のところだけを抜粋しておきました。

このように書いてあります。「草子の箱に入るべき草子どもの、やがて本にもしたまふべきを選らせたまふ。いにしへの上なき際の御手どもの、世に名を残したまへるたぐひのも、いと多くさぶらふ」。いちいち逐語訳していると時間が足りなくなるので、括弧の中に、解釈を書いております。要するに、源氏は、姫君の嫁入り道具として、またそれをそのまま手習いの手本とするために、伝来の写本の中から優れたものを選ぶ。また新調もします。光源氏自らが筆を執って、新しい写本を、手本のために作るというようにすることも書いてあります。その辺りも読むとおもしろいことがたくさん出てきますが、今日は深入りしないでおきます。

さらにまた、次のように書いてあります。「よろづのこと、昔には劣りぎまに、浅くなりゆく世の未なれど、仮名のみなん今の世はいと際なくなりたる」。すべてのことが昔より劣って、浅薄になっていく末世であります。仮名の書だけは、今の時代がこの上なくすばらしいものになっていると、はっきりと書いてあり

ます。「仮名のみなん今の世はいと際なくなりたる」と書いています。すべてのものが浅薄になっていく末世だとありますが、末法思想というものがあって、仏陀が死んでから長い年月がたって、末法という時代に入ると、仏法が廃れて、世の中がひどいことになります。それが、日本で言うと、一〇五二年です。一〇五二年は、ちょうど「高野切」が書かれた頃です。だから、藤原頼通は、宇治に平等院を建てたのです。宇治の平等院は、末法思想と関係しています。そのような時代が近くになっているので、紫式部は、世の中はどんどん悪くなるけれども、仮名だけは今が一番すこいのだと考えているということです。

ところが、考えなければならぬ点があります。では、「今の世」とは、いつなのか、ということですが、当然、普通に考えることは、紫式部が『源氏物語』を書いていて、その中で言っているのだから、紫式部の時代だろうというのが、一つの考え方です。2の①に、それが書いてあります。素直に考えれば、紫式部の時代です。紫式部の生まれた年、死んだ年は、はっきり分かりません。諸説があって、九七〇年から九七八年頃に生まれたと考えられています。死んだ年もはっきり分かりません。一〇一四年から一〇三二年ぐらいの間に死んだという、いろ

いろな説があるので、これぐらいの幅ができてしまいます。三蹟で有名な藤原行成は、九七二年に生まれて、一〇二七年に死んでいます。紫式部と藤原行成は、ほぼ同じ時代を生きています。だから、藤原行成の時代だと考えることができます。これが一つです。

しかし、『源氏物語』を読む上では、そう簡単にいきません。それが、次の②です。②を見てください。「準拠」説と書いてあります。『源氏物語』は、物語の世界を約百年前に設定して書き始めているという説があります。これは認められています。

『源氏物語』の注釈書は、平安末期からあります。平安末期でも、もう読めなくなってしまうのです。鎌倉時代、室町時代、江戸時代を通じて、さらにもすごい数の注釈書が書かれています。これは「かかいしよ」と読むのですが、『河海抄』は南北朝時代に四辻善成という人が作った注釈書です。なぜ有名かというと、準拠論が書いてあるので、有名なのです。『河海抄』には、次のように書いてあります。「物語の時代は、醍醐・朱雀・村上、三代に準ずる闕。」そして、「桐壺帝は延喜、朱雀院は大慶、冷泉院は天曆、光源氏は西宮左大臣、如此相当する也」と書かれています。物語の中の桐壺帝は延喜だと言っています。延喜とは、歴史上の

醍醐天皇です。だから、桐壺の帝は、醍醐天皇をモデルにしています。『源氏物語』の中の次の帝は朱雀帝ですが、歴史上も次に朱雀帝がいます。だから、『源氏物語』の朱雀帝は、歴史上の朱雀帝になります。それから、『源氏物語』の中の冷泉帝は、歴史上の村上天皇、光源氏は源高明がモデルだと言っています。

この説は認められていると言いましたが、次に書いてありますように、山田孝雄さんの『源氏物語の音楽』という本によって実証されています。『源氏物語』の中に書かれている音楽関係の記述をすべて調べています。声調や楽器や唱歌や歌謡など、音楽関係のものがたくさん出てきますが、それを全部調べて、『源氏物語』の中に出てくる音楽は、一条天皇の時代ではなくて、延喜、天曆時代だという結論を出しています。一条天皇は、紫式部が生きていたときの天皇です。延喜は醍醐天皇です。紀貫之が生きていた頃です。天曆は村上天皇、小野道風が生きていた時代です。物語の時代設定としては、『河海抄』が言っているように、桐壺帝は、醍醐天皇がモデルです。朱雀天皇は、朱雀院、歴史上の朱雀天皇です。冷泉天皇は、村上天皇です。つまりそれは道風の時代です。

梅枝巻の仮名に関する記述が、この準拠論に当たる形で書いてあるとしたら、梅枝巻の天皇

は、冷泉天皇です。だから、準拠説によたら、歴史上の村上天皇です。すなわち天曆時代です。天曆という年号は、九四七年から九五七年の間です。ちょうど九五〇年前後です。それは『源氏物語』が作られた一〇〇八年頃から五、六十年前の、小野道風の時代です。小野道風は八九四年に生まれて九六六年に死んでいますから、九五〇年ぐらいはまだ活躍していました。だから、準拠論で考えると、道風の時代になってしまいます。「どっちなの」ということになりません。

素直に、紫式部が「今の世」だと言っているのだからこれは紫式部の時代で、行成の時代だと考えるか、そうではなく準拠論を当てはめて、これは小野道風の時代だ、つまり『源氏物語』よりも五、六十年前のことを言っているのだと考えるか、ということなのです。二つの可能性があるということです。

それを検証しましょう。仮名が絶頂に達した「今の世」とは、行成の時代なのか、道風の時代なのか。ヒントがあります。梅枝巻の本文は、次のように続いています。「古き跡は、定まれるやうにはあれど、ひろき心ゆたかならず、一筋に通ひてなんありける。妙にをかききこととは、外よりてこそ書き出づる人々ありけれど」と書いてあります。訳します。古い筆跡は字形や書

式が決まっています。型通りではあるが、豊かな多様性に乏しくて画一的だ、と言っています。つまり、古い筆跡は、多様性がない、画一的で、巧みで趣深い、妙にかしき筆跡は、「外よりてこそ」と書いてあります。この「外よりて」という言葉が難解なのですが、外から寄ってくるといふ意味でしょう。外から寄ってくるといふことは、遠くから近づいてくるということですから、今から近い世の中という意味になるでしょう。よって、近年になってから、書き始める人たちが現れたという意味になります。

つまり、古い筆跡は、字形や書式が決まっています。画一的で、型どおりのものであり、今に近くなってきたら、もっと多様で、自由で、個性的な書が書かれ始めたと言っていることになります。

そのようなことを念頭に入れて、では、準拠論が成り立つかどうか、確かめます。準拠論ですと道風の時代ですから、九〇〇年代の半ばです。天曆時代だから九五〇年ぐらいの道風の時代の筆跡に、多様性に富んで個性的な仮名が書かれていたか、いなかったかということを確認できれば、準拠論がいいのか、紫式部の時代がいいのか分かるはずですよ。

そこで、天曆期に絞らないで、天曆期前後の仮名の遺品を見てみることにしましょう。確実

なものは非常に数が少ないですが、次のようなものがあります。①から⑥まで挙げてあります。シジメの4枚目、5枚目に写真版が挙がっていますので、それと引き比べて聞いてください。

まず、図1です。藤原定家臨書の、紀貫之自筆『土佐日記』の巻末部分です。『土佐日記』という作品は、日本の古典文学の中で、唯一特別な作品です。なぜ特別かといいますと、先ほど、『源氏物語』の写本のことにつれ、平安時代のもは一行も残っていないと言いました。ところが『土佐日記』は、紀貫之の原本が読めます。紀貫之の原本が、京都の三十三間堂の後白河法皇の宝蔵にあり、室町時代ぐらいまで、あったらしいのです。恐らく、その後応仁の乱で焼けたのだと思います。藤原定家は七十四歳のときに、『土佐日記』の原本、紀貫之の筆跡を写しています。写本しているのです。ところが、定家は、偉大な学者であるし、偉大な歌人であるし、自信家だったので、いろいろ勝手なことをしてしまいます。『源氏物語』でも藤原定家が残した青表紙系統の写本が大事にされますが、実は、私はあまり定家を信じていません。河内本というもう一つの系統があります。そちらのほうがいいと思っています。でも、『源氏物語』の活字になった本は百パーセント、青表紙本です。定家信仰があるか

らです。定家は偉いということが、いまだに続いていきます。でも、定家はとんでもないことをする人です。

定家が写した『土佐日記』は国宝になって今残っています。われわれが知っている高校で習った冒頭は、「をこもすなる日記といふものを、をんもしてみむとするなり」と、「なり」が二か所出てきます。初めの「なり」は終止形に接続しているから、これは伝聞推定である、次のはそうではなくて、連体形に接続するから、これは断定の「なり」であるや、そこで違いを覚えます。ところが伝聞推定の「なり」は、鎌倉時代にはあまり使いませんでした。定家の写したのを見てくださる。「をこもすなる」と書いていません。「をこもすとていふ」と書いてあります。伝聞だから、「といふ」に直してしまっただけです。初めの「一ページだけで三か所ぐらい直しています。定家は、そのような人です。だから、私は信じませぬ。

だけれども、われわれが知っている本文は、ではどうしてあるのか、ということになります。為家という、定家の長男がいます。すべ一年ぐらい後に、同じ本をまた為家が写しています。三十八歳です。定家のように老眼ではないし、仮名の字母まで忠実に写しています。平安時代の字母には鎌倉時代には使わなくなっているも

のが結構あるので、鎌倉時代の人には読みにくいのです。為家は、正確に写しました。為家の本を見ると、われわれが習ったように、「を」をこもすなる」と書いてあります。だから、それが原本だと考えられているわけです。

定家が偉かったことは、写本したときに、最後の二ページだけを臨書しているのです。つまり、貫之の筆跡をそのまま臨書しています。それが、図1です。これは、最後の二ページです。本文は四行あります。「わすれかたなくちをしきごとおほかれと えつくさすまれ かうまれとくやりてむ」、これは最後の文です。さらに漢文があり、いろいろ書いてありますが、要するに、貫之の筆跡がどのようなものかを知るために、形のまま書いておくのだと書いてあります。漢文の二行目に、「謀詐の輩」と書いてあります。定家の時代から、貫之の筆跡などといったら、皆、欲しくて欲しくてしかたがありませんでした。「謀詐の輩」とは、いんちきなやつらで、貫之の筆跡だと言って、いい加減なものを見せている。「それは偽物だから、こういう字が本当なんだ。それを見せるために、臨書しておく」と書いて、臨書したわけです。貫之の筆跡は、このような字だったのです。だから、われわれは、貫之の筆跡が分かります。

一枚目の最後の行から二枚目にかけての記事

に戻っていただきたいのですが、最後の行、①です。藤原定家臨書、紀貫之自筆「土佐日記」の巻末部分です。「土佐日記」の記事は、承平五年、九三五年二月十六日で終わっています。はっきりとは分かりませんが、紀貫之は九四五年頃に死んだと考えられています。つまり土佐日記の記事の年月日が終わってから、十年ぐらい生きていました。「土佐日記」は当然、その間に書かれました。九三五年から九四五年の間に書かれました。九五〇年に近いですね。だから、天曆期のものだと考えたいだろうということです。よろしいですか。それが一番目です。

二枚目に参ります。②です。平安京左兵衛尉跡から出土した墨書土器です。これもはっきりした年代は分かりませんが、一緒に出土した、考古学的な出土物から、大体、九〇〇年代の前半から半ばにかけてといわれています。半ばにかけてということ、天曆期になりますから、これも天曆期近辺の仮名だと考えていいだろうということです。図2です。土器に墨書きしてあるのでよく見えませんが、一文字一文字だったら分かります。一行目は上の方から「いつのまにわすられ」と書いてありますが、その最後の「わすられ」の所。「わ」は分かれますね。これは、昭和の「和」です。次、数字の「数」です。これと同じような字形が、先ほどの貫之の「土佐

日記」にもあります。初めから二文字目です。定家の臨書したものと、「わすれがたく」の「す」の字形がおかしいですね。数字の「数」だけでも、字形がおかしいです。定家は、この字を書き慣れないということだと思います。この「す」は、定家の時代にはあまり書かれていないということです。図2は、同じ「す」を使っています。つまり大体同じような仮名を書いてると考えられます。

次は③です。「醍醐寺五重塔初層天井板落書」。五重塔の二階の天井に使っている材木に、大工さんが和歌を落書きしています。それが、この図3です。これも板に落書きしているから、墨が飛んでしまって、肉眼ではよく読めません。一文字一文字だと、拾い読みができます。一応、翻刻は図の横にしてあります。それを見てみると、一文字一文字、拾えるところはあります。そうするとやはり、図1や図2と似たような仮名を書いています。

④は最近発掘されて、新聞などで大騒ぎになったものです。二〇一六年に山梨県から出てきました、ケカチ遺跡出土の刻書土器です。先ほどの墨書土器のようなものは、お酒などを飲むときにぶざけて歌を詠んで、それを墨で書くということですが、これはそうではなくて、へらか何かで粘土を削って歌を書いています。だ

から、刻書土器と呼ばれています。図4を見て下さい。はっきりした年代は分かりませんが、周りの考古学的な出土品などで検討した結果、九〇〇年代半ばと言われています。九五〇年くらい、つまり、天暦時代、道風の時代です。「われによしおも ひへるらんしけい」とのあはすやみ なはふへる はかりそ」と歌一首が書いてあります。これも一字一字拾うと、大麥古朴な、今のわれわれが使う平仮名のような感じます。

要するに、①も②も③も④も、非常に仮名の姿が似通っている、同じような字形で書いているといえます。だから、皆さんが芸術的に書きになるような、いろいろな字母の仮名を使って書くといふことはやらないといふことです。同じような字体の仮名を使って書いていくということが分かります。

図5です。古筆切の筆者は伝称筆者ですから、本当の年代が分からないので、このような場合には、資料に使えません。ただ、図5は古筆切ですが、私は、かなり古いもの、天暦時代のものではないかと思っています。伝紀貫之筆の自家集切と呼ばれるものです。自家集、つまり、紀貫之の歌集の断簡です。見れば分かるように、すごく変な字で書いてあります。いわゆる草仮名風です。漢字の字母が分かるような仮名がか

なり混じっています。

⑤の説明を読みます。「伝紀貫之筆自家集切。成立年代に諸説あるが、早くに見る者は貫之の晩年、九〇〇年代半ば近くの書写とする」。これは不打ちの料紙を使っています。不打ちとは、こつぞを原料にした楮紙がありますが、楮紙は、漉いたまま書くと、繊維が荒いので毛羽立ちます。写本などを見ても、皆、打っています。砧などで打って、表面をなだらかにしています。だから、ちょっと見では、鳥の子なのか、楮紙なのか、分かりません。顕微鏡で繊維を見ないとどちらか分からないといふことが、結構あります。ところが、定家は古典学者ですから、寸法や、どのような紙に書いてあるといふことを、きちんと記しています。定家のすぐいふところですが、先ほど話しました『土佐日記』の原本、定家が見たものは、そこに不打ちの紙だと書いてあります。つまり、打っていないのです。がさがさの紙です。古い時代には、書きにくいとは思いますが、料紙装飾をそれほどやっていない、楮紙にそのまま書いていた可能性があります。自家集切も、不打ちの紙に書いてあります。料紙の有り様から見て、そしてその筆跡から見て、もしかしたら貫之の最晩年の筆跡ではないかと、私は考えています。そういう理由で、古筆切ですが、これを挙げています。

大事なところは、次のまとめのところです。

読んでまいります。二枚目の七行目、アスタリスクのところです。結論です。「これら天曆期近辺の仮名はみな古体で朴直な字姿」。①や⑤、①は写本です。⑥も写本です。他者に読まれることを意識しています。①や⑤は他者に読まれることを意識した仮名で、②や③や④は、あまり意識していません。お酒を飲んだその土器の底に、酔っぱらって歌を書いたり、天井板に落書きしたりというふうなものですから、人に読まれることをあまり意識して書いていません。でも、その差があまりありません。

人に読まれることを意識していない、個人的な世界のことを「藝」といいます。藝に対して、反対語は何かというと、「晴れ」です。「晴れの儀式」と言いますよね。儀式などで皆の目にさらされたり、写本のように皆に読まれることを意識したものは、やはり晴れのもので、そうではないものは、曇りのものです。つまり、個人の私生活の中で行われる書です。この時代のものは、晴れも曇りも似たような字姿の仮名で書かれていると思われま

特に自家集切の仮名は、同じ文字の形が活字のように定まっていて、重ねてみると、ぴたりと合致します。同じ仮名は皆、同じような字体で、重なるような字形で書いてあります。芸術

的に書こうとしたら、同じ字母でも、同じように書きませんよね。字形を変えますよね。しかし、これは、活字のようなものです。恐らく天曆時代はこのような書き方をしていたのだろうと、私は思います。道風の時代です。

藤原定家臨書の、「貫之自筆」「土佐日記」の巻末部分も、同じような傾向があります。まさに『源氏物語』に書いてあった、「定まれる」「ひるきゆたかならず」「一筋に通ひて」「このよくな筆跡は、そのような表現に当たっている」ということです。『源氏物語』が言う、仮名書芸が最高レベルに達した今とはいつか、この時代ではない、ということなのです。それは、紫式部が生きた時代ですね、ということになります。

そこで、結論です。梅枝巻に書かれている仮名は今の世が最高だと言っるのは、紫式部の時代のことだ、行成の時代のことだと考えるべきであろうと、私は思います。

ただし、もう一つ注意してほしいことがあります。これは仮名の変遷史とも関わりませんが、レジュメの文章を捕捉説明します。「因幡国司解案紙背仮名消息」というものがあります。図6に挙げてあります。これは、かなり古いものと考えられています。九〇五年から九三〇年くらいだろうと言われています。そうすると、紀貫之の時代です。それから、「虚空藏菩薩念誦

次第紙背仮名消息」というものがあります。図7です。それらをご覧いただきますと、両方とも、連綿が使われています。連綿の流麗な女手で書かれています。虚空藏は九六六年ぐらいと言われていますから、やはり九五〇年に近い頃です。道風の時代と考えていいですが、連綿で、きれいな女手で、返し書きがあります。図7を見てください。手紙の本文はどこから始まっているかという点、後ろから三行目の頭からで、「ひとひのおほむかへりには」が書き出します。ずっと書いていって、最後で書きなくなる前の余白に戻って、返し書き→追って書きとも言いますが→するのです。追って書きが三行書いてあります。全体を見ると、散らし書きのようです。このような書が、実は九五〇年近辺にも書かれているということです。

では、これは一体どういうことなのかということなのです。「虚空藏菩薩念誦次第紙背仮名消息」には、散らし書きを思わせる返し書き、追って書きや、行頭を徐々に左下げにする書式が見られます。天曆期の多くの仮名は、古体でありました。先ほど見たように、大麥古い仮名の姿でした。図6と図7は両方、手紙です。仮名で書いています。誰が書いたのでしょうか。女性だろうと思います。男は、手紙を書くときは、漢文で書きます。女性に恋文を送るときは仮名で

書きますが、それは恋文ですから、男の普通の世界の書き方ではありません。これは、女性の個人的な手紙だということです。つまり、先ほど言った、晴れではなくて、曇(曇)の世界では、このような字が早くも書かれていたのです。ただし、これは特別です。女性の曇(曇)の世界です。男の世界では書きません。

だから、資料というものは、どのような状況で書かれたのかということを考えないといけません。同じ時代だからただ並べたら、「じゃあもつ、連綿書いてるじゃない」ということになってしまふわけです。そのように考えないでほしいです。TPOが違うということです。場によって書き方が変わるわけで、女性の曇(曇)の世界では、このようなものが早くも始まっていると考えていいだろうということです。手紙は相手が読みますから、読み手を意識していますから、そのような意味では、きれいな、流麗な、連綿の女手で書くことが早く発達したと考えられます。

次をまた読みます。「女性の私的な(曇)世界では女手が進化していたと思う。読み手をより強く意識して書かれていたのである。また、天曆期というのは、枕草子や大鏡で名高い村上天皇の宣耀殿の女御の逸話があった時代。これはどのような話かといいますと、大臣の姫君

が、村上天皇と結婚しました。その姫君が子供  
のとき、父親からどのような教えを受けたかと  
いうと、「一つには御手をならひたまへ」、中略  
しますが、「さては、古今の歌二十巻をみなう  
かべさせたまふを、御学問にはせさせたまへ」。  
つまり、まず初めに仮名の筆跡を習え、その次  
は古今集をすべて暗記しろ、と父親に言われま  
した。それが、身分の高い女性の教養でした。  
そのようなことができないと、天皇や身分の高  
い貴族と結婚できませんでした。

中略してしまいましたが、もう一つあります。  
それは音楽です。楽器を弾けるようにというこ  
とです。それが、平安時代の身分の高い女性の  
三大教養でした。それができないと、一人前にな  
れませんでした。村上天皇の妻の話ですから、  
天曆時代です。女性教育の場では、このような  
ことが行われていたということです。男の世界  
ではありません。

「貴族の姫君の教養として、仮名を手習する  
ことが定着している時代。そのような時代に、  
土佐日記の巻末部分の臨書や、墨書土器や、醍  
醐寺五重塔初層の天井の板落書や、刻書土器の  
ような素朴で古体な仮名ばかりが書かれていた  
わけではなく、それとは別に、主に女性の襲  
の世界では、美しく洗練された女手が成立して  
いたと考えられる」。これも、私流の、仮名の

変遷史です。教科書的な記述の中には、恐らく  
そのようなことは書いていないと思います。

さらに言えば、連綿の女手は早くから進化し  
た、実は、それはもっと早くから進化してい  
ると、私は思っています。すでに『古今集』成立  
よりも前に、女性の世界では書かれていたと、  
私は考えています。その証拠は何か。それがそ  
の次の「教王護国寺檜扇」と呼ばれるものです。  
五枚目の初めに挙げてあります。図8です。こ  
れは檜扇ですから、木の上に書いています。千  
手観音という観音様の、中が空洞になっていま

すが、右腕の空洞の部分から発見されました。  
仏像の願主や、願いをかけたりした人が、自分  
の持ち物を仏像の体内に入れるのです。そして、  
檜扇ですから、当然、これは、女性が持ってい  
たものです。よく見えますが、図8を見てい  
ただくと、一行目の漢字は何となく分かります。  
「无量授如来」と書いてあります。次に「にも」と、  
これは連綿になっています。「にも」とつなげ  
て書いてあります。次は「たて」と書いてあり  
ます。「たて」と、これも連綿で二文字続けて  
書いてあります。つまり、連綿が始まっていま  
す。何年ぐらいかというところ、これは恐らく古  
く、八八〇年ぐらいだったでしょう。八〇〇

年代の末です。先ほどふれた「有年申文」とい  
う草仮名の一番古い資料から、十年ぐらいしか

違いません。もう連綿で書いています。

ということは、女性の個人的な世界では、か  
なり早くから連綿や女手が始まっていると考え  
られます。ただし、それがすべてではありません。  
写本を取ったり、人が見るものときは、  
そうではない、先ほどの『土佐日記』や自家集  
切のような、古朴な字で書いていたと考えられ  
ます。

その次です。もう一つ、注意すべき点があり  
ます。二枚目の真ん中辺りです。「注意を要す  
る絵合巻」です。

「絵合巻」というものがあります。先ほどの「梅  
枝巻」よりも八年ぐらい前の巻です。藤壺の御  
前で物語絵合というものが行われます。物語を  
絵巻物にしたものを、右と左に分かれて出し  
合っ、歌合のように、勝ち負けを競う儀式で  
す。これは晴れの場合です。そこにどのような  
とが書かれているかというと、左方が、『竹取  
物語』の絵巻で、詞書を紀貫之が書いていると  
あります。右方が、『宇津保物語』の俊蔭の巻  
です。詞書を小野道風が書いていることになっ  
ています。ということは、紀貫之と道風だから、  
九〇〇年ぐらいと九五〇年ぐらいになります。  
この場では右と左がそのようになっていま  
して、右の道風の筆跡のことを「今めかしうを  
かしげに、目も輝くまで見ゆ」と書いています。

「今めかしい」という言葉を使っています。「今めかし」とは、現代風だという意味です。道風の筆跡が、現代的だということでは言っています。先ほど違います。先ほど見た、ここから八年後の「梅枝巻」では、そうではありませんでした。仮名が発達したのは、紫式部の時代と考えなければおかしいと、先ほど言いました。ここでは、道風の時代が「今めかしい」と言っています。「おかしいではないか」ということになりますね。しかし、きちんと読めば、少しもおかしくありません。

先ほどこれは、晴れの儀式の場だと言いました。『源氏物語』の中では、晴れの儀式などを書く場合に、実は準拠が使われます。つまり、百年から五六十年前の時代設定で書かれます。すべてに準拠論が通じるのではなくて、晴れの儀式を描写するときに、そのようなことが行われる傾向があります。

「総合巻」では、小野道風の筆跡を、「現代的で、華やかで美しい、まばゆいほど」と評しています。つまりここでは、道風の書が、『源氏物語』の今の時代の書になっています。加えて、このときの天皇は誰かという、冷泉天皇です。冷泉天皇は歴史上の村上天皇をモデルにしているから、まさに道風の時代に合致します。「準拠説によれば、歴史上の村上天皇をモデル

にしているという。村上天皇と小野道風は同時代の人である。これのみならず、この総合は細部にわたって、村上天皇の天徳四年内裏歌合という、有名な歌合に準拠している」。天徳四年内裏歌合は、いろいろなおめでたいものを用意して、盛大に行われた儀式なので、後の歌合のお手本になりました。恐らく、村上天皇の天徳四年内裏歌合をモデルにして、「総合巻」の総合が書かれていると考えられます。ということは、準拠するわけですから、村上天皇の時代のこととして書いているということですね。違いが起こっています。「梅枝巻」は、準拠を使っていません。「総合巻」は、準拠を使って書いています。つまり、「総合巻」の総合の晴れの行事においては、準拠説の言うとおり、道風の時代ですから、道風の書を、『源氏物語』の今の時代という設定で語っています。「総合巻」と、それから僅か八年後の「梅枝巻」では、今の時代の書と言っているものが、別のものだということに注意しなければいけません。『源氏物語』を読むときは、そのような細心の注意をしないと、読み間違えるということです。

それでは、3に行きます。最後の検証です。紫式部が言うように、紫式部の時代は、本当に仮名の全盛期だったのかということです。それを考えてみます。成立年次が証明されていない

古筆切は除きます。「伝道風」となっていますが、道風の時代の書はありません。ほとんどが、院政期のものです。「高野切」以降のものです。平安古筆とわれわれが言っているものは、ほとんどが院政期のものと考えていいです。それらを除いた、確実な『源氏物語』の時代の仮名遺品を、①から④まで挙げています。それぞれ説明します。レジュメ五枚目に写真版が挙がっていますから、図版と見比べながら聞いてください。説明のところを読みます。『源氏物語』時代の仮名で注意すべき資料は、①「稿本北山抄紙背仮名消息」と、②「因明義断略記紙背和歌」の二つだと、私は思います。

図9が「北山抄紙背仮名消息」です。これはきれいですね。流麗な、連綿と女手、追って書きもありますから、散らし書きのように見えます。一行一息で書き下ろすような、のびやかな連綿が大変きれいです。行頭を左下げにしたり、上下させたりして変化をつけているし、返し書きもあります。追って書きもあります。つまり、散らし書きに通じる書き方をしています。手紙という個人的な褻の世界の行為ではあっても、読み手を意識して書かれているので、非常に美しく、洗練された書き方になっています。つまり、女性の褻の世界、個人の世界でも、連綿と散らし書きなどの書き方が、さらに進化してい

ると考えていいということです。

さらに注意すべきが、その次です。書道の本で写真版が載っているものは少ないと思います。これは大事な資料だと私は思っています。「因明義断略記紙背和歌」と呼ばれているものです。寛弘七年、一〇一〇年の奥書がある『因明義断略記』の巻末に書かれている和歌です。「因明義断略記」は、仏典の注釈書のようなものです。これは、男が書いていると思います。その巻末の余白に和歌が書かれているので、これも男が書いているのだろう、坊さんかもしれないと思います。図11が、これです。驚くべきは、「なつこころ さきかゝり けれどちのはな まつにとのみも おもひ けるかな」。一〇〇六年ぐらいに成立した『拾遺和歌集』に載っている和歌が、「継色紙」のような散らし書きにされています。『因明義断略記』は仏書であるし、「伝領東大寺蓮乘院経庫蔵」とも書いてあるので、経蔵にありました。そのように奥書に記されているので、僧侶の筆跡だろうと思います。けれども、筆線は結構強くて、それでいて優美な書き方になっています。僧侶でもこれぐらいのものは書いていたのです。紫式部の時代です。

それから、確実な資料として、②の『御堂関白記』。道長の自筆の日記で、国宝です。陽明

文庫にあります。この中に、和歌を書いた箇所が二か所あります。当然、仮名で書かれています。その一つを、図10に挙げています。割と古朴な仮名です。図9の手紙や、図11の和歌の書き方と比べると、むしろ天曆期の仮名に近い、連綿もあまりしていない、分かりやすい仮名の書体ばかりを使って書いてあります。これは、道長の自筆です。だから、紫式部の時代です。②の「御堂関白記和歌」は、日記ですので記録として書かれています。

それから、④「屏風詩歌切」、図12です。これは、屏風の色紙形を挿毫するための手控えです。メモです。もう少し説明しますと、当時の貴族が書いた日記が残ってしまって、一〇一八年一月に道長の息子の頼通が、大饗という宴会を開きました。お正月のお祝いか、併せて誰かの昇進のお祝いなどのときに、大饗という大宴会を開きます。そのときに屏風を新調しました。屏風には絵が描いてありますが、その屏風の上に、四角い色紙形が貼ってあって、そこに漢詩や和歌を書きます。では、その和歌は誰が書いたかということ、その日記にきつくと書いてあります。行成が書いたと、記されています。これはその下書きです。つまり、漢詩はどのようなものを選ぶか、和歌はどのようなものを選ぶかということを書いた、下書きのメモです。少し前まで

は行成の息子の行経の筆跡と言われていたが、今はそのように考えていません。行成が、どの漢詩を書くか、どの歌を書くか、メモを作ったわけですから、これは行成のメモです。今では、これは行成筆と考えられるようになっていきます。伝ではありません。行成真筆と考えられています。

これは下書きです。つまり、人が見るものではありません。道長の日記も、子孫は見るかもしれませんが、日記だから、書いてすぐに誰かに見せるものではありません。だから、両方とも、襲(つ)の世界のものです。そのような世界だときれいに書こうとしないから、図10も図12も似ています。つまり、分かりやすい仮名で書いています。連綿を使って流麗に書くのではなくて、一字一字、はっきりと分かりやすい文字で書いています。上の段の図9や図11と、図10と図12の違いが出てくるのは、先ほど言った、書場の問題です。どのような状況で書かれた書なのかによって、全然違ってまいります。これに気をつけてほしいと思います。

今説明したことを、ざっと読みます。三枚目の初めから読んでいきます。要するに、道長のこの日記のごとですが、「他人の目を意識して書かれたものではない、美的洗練を自指して書かれたものではない。たくまぬ運筆に、かえっ

て気品と強さと雅趣を宿している、「良い筆跡だと私は思いますが、けれども、「これらはあくまで当時の常用体」、「日常の筆跡だということ」です。「かつ、襲の世界の仮名の姿であり、他者を意識した晴れの世界の字姿とは異なるもの。この両者のような仮名の姿は、姫君の手習いの手本、贈答用の豪華本など当時の仮名書芸美を自指した字姿ではない。他人の目を意識しない常用体の仮名」―『源氏物語』は、「ただの仮名」と言っています。「ただの」と出てきます。女手と、ただの仮名は違います―」であって、いつもそのような飾り気のない仮名を書いていたわけではない。書は目的、TPOによって書き分けられるのであり、目的の異なる仮名を同じ組上で論じては、真実を見失う。」②や④を根拠にして、「行成の時代の、つまり『源氏物語』の時代の仮名がさほど洗練されていなかったと言う人もいますが、場の違う仮名を一緒くたに見ているわけで、それは誤りだということ」です。日記の中に書いてある、人が見ない書き方や、自分のメモのために行成が書いたものは、人が見ることを意識していないから、このような筆跡で書いているのであって、晴れの場では、もっときちんと美しい字体で書いていこうとします。

アスタリスクのところですか。「これらの資料

からみて、『源氏物語』の時代に、すでに流麗な連綿、巧妙な散らし書きが十分に発達していたと考えられる。『源氏物語』の頃の仮名、紫式部時代の仮名は、端正優雅であり、完成期に達していたと言えよう。」と、私は思います。「完成期」という言葉を、あえて使っています。なぜかという、次の4があるからです。

紫式部は、仮名の爛熟期、絶頂期を知らないということ。先ほど言ったように、われわれが見ている平安仮名古筆は、ほとんどが院政期のものです。つまり、一〇五〇年以降のもの。紫式部は生きていませんから、知らないのです。読みます。アスタリスクのところ。『だが、右のごくわずかな撰関期の仮名遺品を除くと、現存する平安時代仮名古筆の名品とされるものは、ほとんどが十一世紀半ばの高野切から十二世紀初めの西本願寺本三十八人集、二十巻本類聚歌合辺りまでに集中している。その中に寸松庵色紙、升色紙、小島切、針切、紙縫切、香紙切、本阿弥切、元永本古今集、二十種におよぶ筆跡による西本願寺本三十六人集など、個性に満ちた名跡がひしめいている。仮名書芸の爛熟期は、『源氏物語』よりも五十年ほど後にやって来たのである。紫式部にとって、自分の生きた時代でただ一つ誇れるもの、それは仮名書芸であった。が、生まれるのが早すぎ

た紫式部は仮名の爛熟期絶頂期を知らなかったことになる。」ということ。これが結論です。大体ここまでで、自分の言いたいことは済みました。最後に付け足しのようなものですが、二つの古筆について、一個五分で説明します。

最近のことですが、紫式部の時代に仮名は完成期に達していたということを証明してくれる資料が二つ出てきました。まず、図13を説明します。レジュメⅣの①です。

伝行成筆古今集切と呼ばれていたもので、優美でたくみな散らし書きと、流麗で雅な筆致で名高い古筆切です。特に白鶴美術館と春敬記念書道文庫のものは、異なる色の料紙を継いだ、大変美しいもので、ツレは五枚あります。『古今集』以外の歌を書いたものや、色紙でないものもあります。今度出てきたものは、『拾遺集』の歌を書いた色紙を継いだ、六葉目です。

私は、二十年ほど前から古筆切の料紙の年代測定をやっています。余白を「ミリメートル」、糸のように切り出して測定します。完璧な写本だったら私も切りませんが、古筆切は切られてしまっているのです。余白を切り出します。表裏に掛けるとき、表裏屋さんが、化粧断ちといって、きれいな四角形になるように、「ミリメートル」の周りを切ります。あれがあると、測れます。たくさんの紙を無駄にしているわけではありま

せん。古筆切で切られていて、余白があるから、そこを使って年代測定をやっています。人によって、茶化す人は、紙を大量に切って、機械に入れると思っています。そのような世界ではありません。最先端科学の世界です。物質の根源は、たどっていくと、分子になって、原子になって、私が中学校で習ったことはそれぐらいでしたが、さらに電子や素粒子や、ものすごい、目に見えない世界に入ります。そのような物質を測る機械が、年代測定の機械です。

われわれは、大気を吸っています。この中に、放射性炭素14というものが入っています。紙の元は植物です。だから、植物も炭素14を吸っています。紙にするために切ってしまうと、植物は死にます。呼吸しなくなるから、体内に入った炭素14の量がそこで止まります。放射性物質だから、半減期というものがあって、何十年や何百年、長いものは何千年ですが、量を半分ずつ減らしていきます。そこで、現在残っている紙の中の炭素14の量を測ることで、何百年前に作られた紙かわかるわけです。先ほど言ったように、目に見えない世界のことなので、最新鋭科学機器である加速器質量分析装置によって測定します。誤差は大きいですが、ある程度測ることができます。

説明は書いてありますから後でゆっくり読

んでいただきたいのですが、二シグマ、二標準偏差の計算で出したものは、確率が九十五パーセントです。九十五パーセントの確率で、その誤差範囲に、紙の年代が入っているということです。

昔、紙は貴重ですから、何十年も何百年も置いてから書きません。そのように言う人もいますが、それは平安時代の実態を知らない人です。『源氏物語』の中にも出てきますが、紙屋院といって、北野天満宮辺りに朝廷の紙漉き場があって、上質紙を漉いていましたが、光源氏が、何か必要のあるときには、そこで漉かせています。そして、すぐに使ってしまう。余った余剰の紙など、あまりありません。何十年も、百年も二百年も古い紙を使うことはあり得ないと思っています。『源氏物語』の中で、末摘花という女性が、父親の遺品である古い紙を使ったというところで、ばかにされています。江戸時代とは違います。江戸時代は商業が発達しているから物がたくさんありますが、平安時代はそうではありません。だから、書いた年代と紙の年代はほとんど違わないと考えていいということです。

話をもどします。測った結果、色紙を継いでいるほうは、九七七、(九九八、一〇〇四、一〇一二)、一〇三三という結果でした。九七七が、

誤差範囲の一番古い年代です。括弧の中の数字が、炭素14の年代です。何千年もの大木を切り倒して、年輪があるでしょう。年輪は一年ごとでしょう。その一年ごとの年輪の中に入っている炭素14を測定して、年代を出すグラフができています。それに当てはめて、年代を出します。単純な正比例のグラフならば交点は一つですから、炭素14の年代に当たる年代は一個しか出てきませんが、実際のグラフは波うつように揺れています。だから、ある年代だと、交点が二つも三つも出てきてしまいます。それで、九九八年、一〇〇四年、一〇一二年と、炭素14の年代が複数出てしまうわけです。この中のどれかが、一番確率が高いということです。誤差範囲の一番遅いものが、一〇三三年です。九九八や、一〇〇四や、一〇一二は、『源氏物語』の時代に近い年代です。これが書かれた時代は、『源氏物語』の時代ということです。「高野切」より古かったです。

「高野切」は、私は持っていませんから、測れません。同じ時代の古筆があります。「十巻本歌合」は、同じ時代です。それは持っているのですが、それを測ったら、違う年代が出てきました。それは、この④の最後のほうに書いてあります。一〇二四(一〇四八、一〇九九、一一一九、一一四二、一一四七)一一六〇、

このような年代が出てきました。院政期の古筆切を他にも五、六点測りました。全部、この数字とほとんど同じ数字が出てきます。つまり、「高野切」より後、一〇五〇年より後の院政期の古筆を測ると全部、このパターンで出てきます。先ほどのパターンを見てください。先ほどのパターンは、一時代前なのです。

私は「関戸本古今」を測ってみたいと思っておりますが、あれも料紙がそっくりです。染めた紙にその他の装飾がありません。料紙装飾が同じです。だから、「高野切」より早いのではないのでしょうか。「関戸本古今」を測ったらこれと同じ年代が出るのではないかと密かに思っています。残念ながら関戸は持っていませんので、まだ測っていません。

もう一つ、Ⅳの②、図14です。これは、ツレがありません。これ一点しかありません。歌が書かれています。この歌もどこにも残っていません。国文学の分野では『新編国歌大観』という何十巻もの本があって、今残っている歌は全部そこに載っています。勅撰集から、私家集から、その他のものまで全部入っていますが、この歌は入っていません。だから、散逸してしまっただけの歌集の歌なのです。写本が残らないで途中でなくなってしまった。そのような歌なのです。

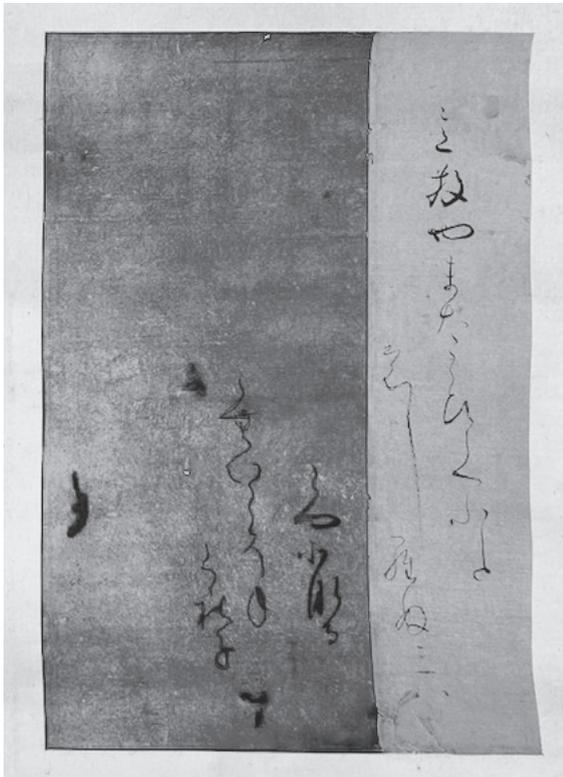
発見したときに驚いたのは、よく見ると、青く、薄藍の繊維がかかっています。このような紙は、古い紙です。国宝「智証大師諡号勅書」(小野道風筆)というものがありますが、その紙も、同じような紙を使っています。先ほど言った紙屋院というところで、官製の、朝廷の紙漉き場で作った上質紙です。同じ紙です。だから、「ひょっとして、これ、古いんじゃないかな」と思って、手に入れました。これも①とまったく同じ年代が出ました。二つとも『源氏物語』の時代の紙だと分かりました。

後でじっくり見てほしいのですが、②は草仮名風の仮名で書いてある文字がたくさんあります。「由<sup>ゆ</sup>」や「无<sup>む</sup>」や「散<sup>さん</sup>」や「之<sup>の</sup>」や「保<sup>ほ</sup>」や「遠<sup>とほ</sup>」佐「数<sup>す</sup>」美「奈<sup>な</sup>」は、草仮名風に書いてあります。字母が分かるような字体で書いてあります。これは、意図的に書かれていると思います。

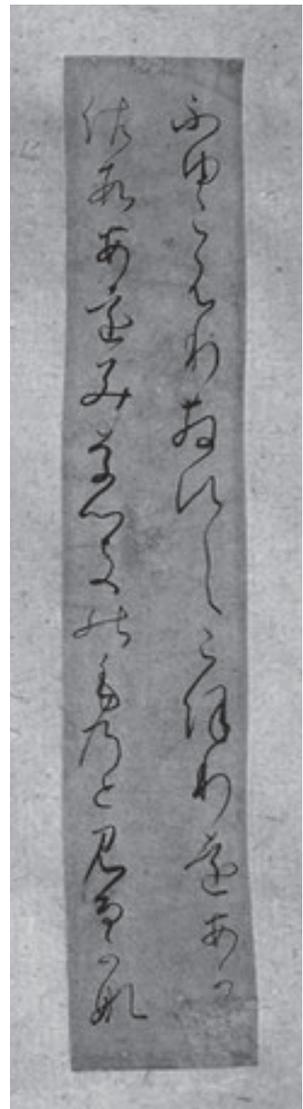
草仮名風の文字をたくさん織り込んで、書いてあります。『源氏物語』の中に、「草がち」という言葉が出てきます。「草がち」というのは、草仮名風の文字が多いということでしょう。「何とかがち」は、多いということですから、恐らく『源氏物語』が「草がち」と呼んでいるものはこのような書き方なのだろうと、私は思っています。科学的に証明された、『源氏物語』時代

のものだと新しく分かった、二つの古筆です。本日持参したものがもう一点あります。中央公論社の『日本の書』という本に三蹟の真筆だけを挙げてある一冊がありますが、その中に、これがカラー写真で載っています。これは、その現物です。行成の真筆で散逸漢詩集が書かれています。仮名ではなくて、漢字です。同じ時代の和様の漢字と仮名がどのように違うのか見比べてもらいたいので、持ってきました。以上の三点が『源氏物語』の時代の書と判明しているものです。

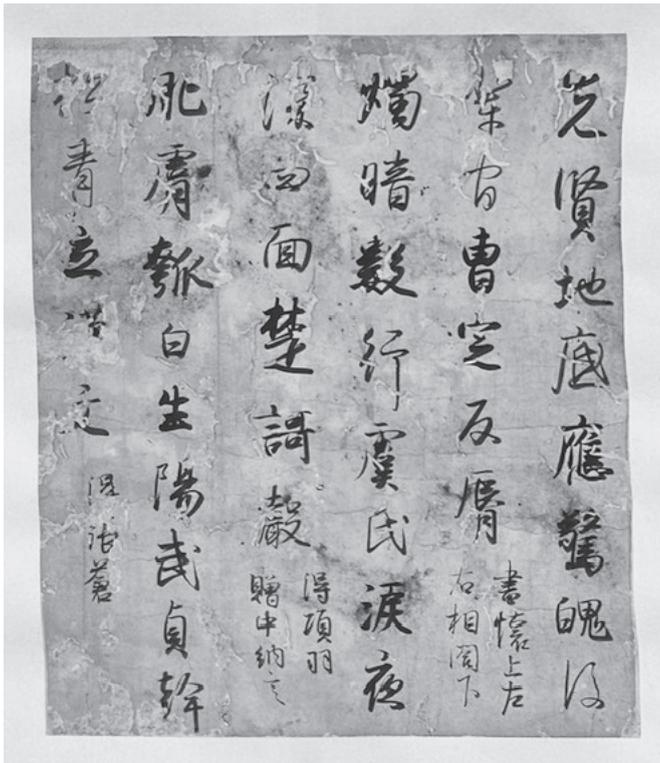
急ぎましたが、これで終わりたいと思います。あとほじっくり鑑賞ください。どうもありがとうございました。



伝 藤原行成筆 未詳散らし歌切



伝 紀貫之筆 草がち未詳歌切



藤原行成筆 未詳佳句切

全日本書道連盟 書道講演会 源氏物語と紫式部の書道観

池田和臣 令和五年一月二〇日 於 国立新美術館

I 源氏物語についての基礎知識

- 1 なぜ成立年代や作者が紫式部であると解するのか
- 2 はじめの形態、何巻から成り立っていたか
- 3 構成・主題
- 4 写本と本文系統

↑時間がないので割愛

II 仮名成立史と文学史

- 1 仮名の成立―書道史の教科書的通説は国語国文学の表記史研究
- 2 仮名の成立と和歌の変質
- 3 仮名の成立と家集・仮名日記・物語の発生

↑時間がないので割愛

III 源氏物語の仮名書芸論

1 仮名は「今の世」が絶頂と紫式部は考えている

・梅枝巻、光源氏の一人むすめ明石姫君が春宮に嫁入りする準備の場面。紫式部は光源氏の口を借りて、仮名書芸について興味深い見解を披瀝している。

「車子の箱に入るべき車子どもの、やがて本にもしたまふべきを遷らせたまふ。いにしへの上なき際の御手ども、世に名を残したまへるたぐひのもの、いと多くさぶらふ」(源氏は姫君の嫁入り道具として、またそれをそのまま学習の手本とするために、伝来の写本の中から優れたものを選ぶ。(また、新調もする))

「よろづのこと、昔には劣りざまに、浅くなりゆく世の未なれど、仮名のみなん今の世はいと際なくなりたる」(すべてのことが昔より劣って浅薄になってゆく末世だけれど、仮名の書だけは今の時代がこの上なく素晴らしいものになっている)

2 仮名全盛の「今の世」とはいつか

① 紫式部の時代(九七〇から九七八、一〇一四から一〇三二)。藤原行成(九七二―一〇二七)の活躍した頃。② 「準備地」説。源氏物語は物語世界を約百年前に設定して書き始めているという説。河海抄「物語の時代は、醍醐・朱雀・村上、三代に准ずる間。桐壺帝は延喜、朱雀院は天慶、冷泉院は天曆、光源氏は西宮左大臣、如此相當する也」(物語の桐壺帝は歴史上の醍醐天皇、朱雀帝は朱雀天皇、冷泉帝は村上上天皇、光源氏は源高明がモデル)。これは山田孝雄『源氏物語の音楽』(昭和九年、宝文館)によって実証されている。源氏物語の音楽関係の記述全て(声調・楽器・唱歌・唱歌・踏歌・五節・管弦など)を分析し、源氏物語の描く時代は一条朝ではなく延喜天曆時代とする。

梅枝巻の天皇は冷泉帝だから、運搬説によれば歴史上の村上上天皇、すなわち天曆時代(九四七―九五七)に当たる。源氏物語が作られた頃(一〇〇八)より五、六〇年ほど前の小野道風(八九四―九六六)が活躍した頃に当たる。

↓ 仮名が絶頂に達した「今の世」とは、① 行成の時代か② 道風の時代か。

・梅枝巻の本文は次のように続いている。

「古き跡は、定まれるやうにはあれど、ひろき心ゆたかならず、一筋に通ひてなんありける。妙にをかしくことは、外よりてこそ書き出づる人々ありけれど……(古い筆跡は、字形や書式が決まっけていて型通りではあるが、豊かな多様性に乏しく画一的でどれも似ている。それに対して、巧みで趣深いものは、近年になつてから書き始める人たちが現れた。)

この言を裏返せば、「今の世」の仮名は字形や書式が決まっけていず、画一的で型通りではなく、多様性に富み個性的だということになる。

↓ 多様性に富み個性的な仮名が、九〇〇年代半ばの天曆時代に書かれていたか、いなかったか。

・天曆期前後の仮名の遺品。確實なものは数少ないが、次のようなものがある。

① 藤原定家臨書、紀貫之自筆土左日記の巻末部分【図1】。土左日記の記事は承平五年(九三五)二月一六日

で終わっているので、九三五年から程なき頃の筆跡。

- ②平安京左兵衛尉跡出土墨書土器【図2】。九〇年代前半から半ばにかけてのもの。
- ③醍醐寺五重塔初層天井板落書【図3】。醍醐寺五重塔は天曆五年(九五)一〇月に竣工、その頃のものと一〇一六年クカチ遺跡出土刻書土器【図4】。九〇年代半ば。
- ④伝紀實之筆自家集切【図5】。成立年代に諸説あるが、早くに見る者は真之(八六八頃/九四五)の晩年、九〇年代半ば近くの書写とする。私見でも、不打ちの料紙から真之晩年か没後すぐの天曆期と考える。

\* これら天曆近辺の仮名はみな古体で朴直な字姿。①の他者に読まれることを意識した仮名と②③④の個人的な變の仮名との差がない。とくに自家集切の仮名は、同じ文字の形が字字のように定まっついで、重ねてみるとびたりと合致する。藤原定家臨書紀實之自筆土左日記の卷末部分も同様の傾向。まさに、「定まれる」「ひろき心ゆたかならず」「一筋に通ひて」とされる古い筆跡と見なすことができる。ということは、源氏物語の言う仮名書姿が最高レベルに達した「今」とは、天曆期ではなく、やはり崇式部の生きた源氏物語の書かれた時代とすべき。

ただし、留意すべきこと。因幡国司解案紙背仮名消息(九〇五/九三〇)【図6】、虚空蔵菩薩念誦次第紙背仮名消息(九六六頃)【図7】は、連綿の流麗な女手。特に虚空蔵菩薩念誦次第紙背仮名消息には、散らし書きを思わせる返し書き(追而書)や行頭を徐々に左下げにする書式が見られる。天曆期の多くの仮名は古体であったが、女性の私的な(變)世界では女手が進化していたと思う。読み手をより強く意識して書かれていたのである。また、天曆期というのは、枕草子や大鏡で名高い村上天皇の宣耀殿の女御の逸話(父大臣から「つには御手をならひたまへ、…さては古今の歌二十巻をみなうかべきたまふを、御学問にはせさせたまへ」と教えられ、古今集をすべて暗記したという話)のあった時代。貴族の姫君の教養として、仮名を手習することとが定着している時代。そういう時代に、土左日記卷末部分隨書や、墨書土器や、醍醐寺五重塔初層天井板落書や、刻書土器のような素材で古体な仮名ばかりが書かれていたわけではなく、それとは別に、主に女性の書かれた世界では、美しく洗練された女手が成立していたと考えられる。

さらに言えば、連綿の女手はすでに古今集成成立よりも前に書かれている。教王護国寺繪扇(八七七)【図8】であるが、やはり女性の私的な世界である。女性の變の世界ではかなり早くから連綿と女手が始まっていたと考えられる。

注意を要する絵合巻。藤蓋の御前での物語絵合では、左方の竹取物語絵巻の詞書が紀實之筆、右方の宇津保物語俊隆筆絵巻の詞書が小野道風となつている。そして、この道風の筆跡を「今めかし引をかしげに、目も輝くまで見ゆ」(現代的で華やかで美しくまはゆいほどに見える)と評している。つまり、ここでは道風の書が源氏物語の「今」の時代の書なのである。くわえて時の御門は冷泉帝。進徳記によれば歴史上の村上天皇をモデルにしていう。村上天皇と小野道風は同時代の人。これのみならず、この絵合は細部にわたつて、村上天皇主催の天徳四年内裏歌合(九六〇)に連綿している。つまり、絵合巻の絵合の唄の行事においては、進徳記の言うとおり、道風の書を源氏物語の「今」の時代の書という設定で語っている。絵合巻とそれからわすか八年後の梅枝巻とは、書の「今」が異なることに注意しなければならない。

3 源氏物語の時代が仮名の全盛期だとする崇式部の見識は正しいか。

\* 完成期にあつたとはいつてよからう。

・ 確實な源氏物語の時代の仮名遺品は成立年次が証明されていない古筆切を除くと確かなものはごくわずか。

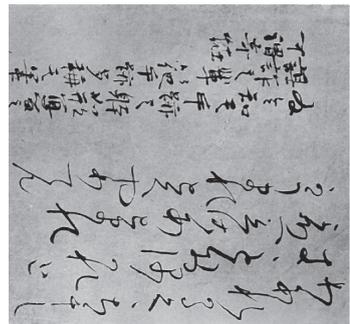
- ①藤原公任筆藤原北山抄紙背仮名消息(九九六から一〇〇四年頃) 【図9】
- ②藤原道長自筆御堂開白記和歌(一〇〇四年および一〇一年) 【図10】
- ③因明義断略記紙背和歌(一〇一〇年頃) 【図11】
- ④藤原行成筆撰政藤原頼通大饗屏風詩歌切(一〇一八年) 【図12】

・ 源氏物語時代の仮名で注意すべき資料は、①稿本北山抄紙背仮名消息と②因明義断略記紙背和歌。北山抄紙背仮名消息は一行を一息で書き下るすような、暢びやかな連綿が美しい。行頭を左下げにしたり上下させたりして変化をつけているし、返し書きもある。散らし書きに通じる書き方である。手紙という個人的な藝術的行為ではあつても、読み手を意識して書かれていたので、美しく洗練された書き方になつている。

因明義断略記紙背和歌は、寛弘七年(一〇一〇)の奥書のある因明義断略記の卷末に書かれている和歌。驚くべきは、「なつにこそさきかよりけれふちのはなまつにどののみもおもひけるかな」(夏に咲きかかるとのたつたの藤の花は。松にだけ咲きかかると思つていたよ)という拾遺和歌集(一〇〇六年前後成立)に載つていゝ和歌が、緑色紙のような散らし書きにされている。因明義断略記は伝書であるし、「伝領真大寺運乘院経庫蔵」とも記されているので、僧侶の筆跡かと推察されるが、筆線は勁くかつ優美である。

・ 御堂開白記和歌は日記の記録。④屏風詩歌切は屏風色紙形を複製するための手控え(自分用のメモ書き)。

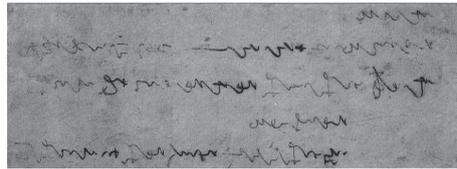




【図1】藤原定家臨摸 紀實之筆士左日記卷末



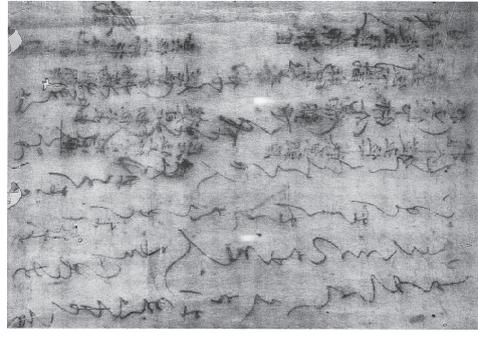
【図3】醍醐寺五重塔初層天井板落書



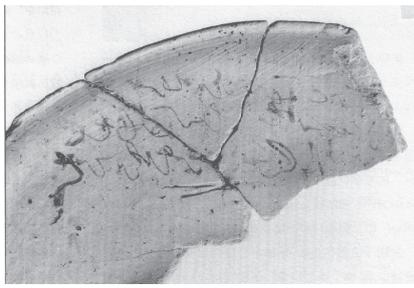
【図5】伝紀實之筆自家集別

わかれかたたくちをし／きとほほかれと  
えつさすとまれ／かうまれとくやりてむ

【図6】因幡国司解案紙背仮名消息

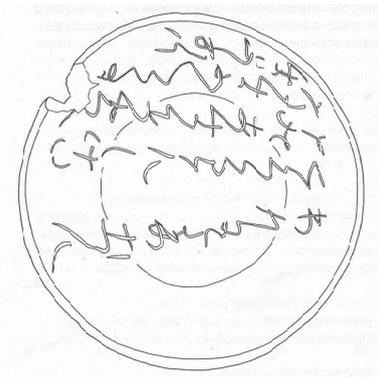


しどめつらしとほせだまへる／よる二ひをたん……



【図2】平安京左兵衛府跡出土墨書土器

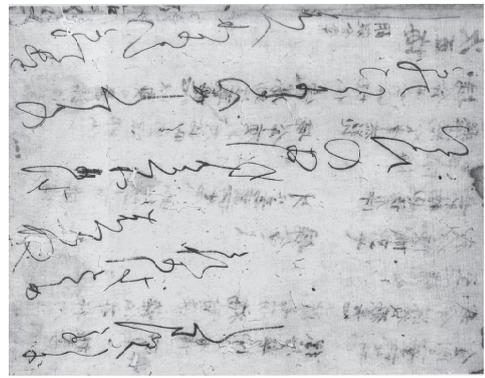
いこのまにわすられ／けむあかみにはゆめの  
□はかはるつゝなり



【図4】クカ子遺跡刻書土器(九〇〇年代半ば)

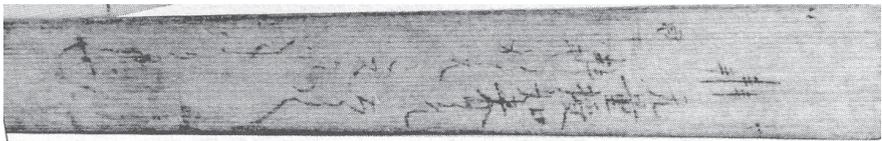
われによりおも／ひくるんけい／とのおはすやみ  
なはふくる／はかりそ

【図7】虚空蔵菩薩念誦次第笈紙背仮名消息



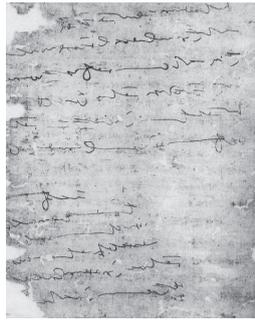
ひとひのおほむか／りには／かひこと……

【図8】教王護国寺僧房



手紙紙目来にも たていねも 二に ま口や

【図9】藤原公任筆稱本北山抄紙背仮名消息



あやしきうしのこときはき  
てはへりしいかなりはへり

(追而書)おなかしといわづか  
はへるをいとまごいともう

たまはせたりしか...

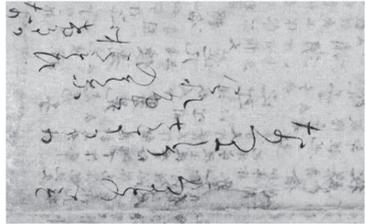
【図10】藤原道長自筆御建國日記和歌



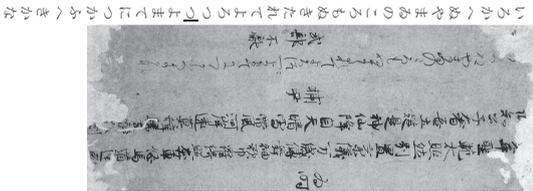
六日雲深朝早左衛門監許かくいひやる わかなつむかすかのはらに

ゆきふれは二つかひをけふさこそやる

【図11】因明義略略記紙背和歌



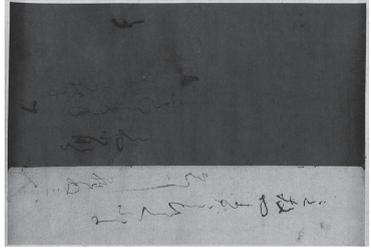
なつにこそなきかよりりけれふちのはなまつにどのみおむひけるかな



【図12】藤原行成筆撰改藤原頼通大甕屏風詩歌切

いるかへぬやまぬのころもぬきたれてよるつよまてにつかふきかな

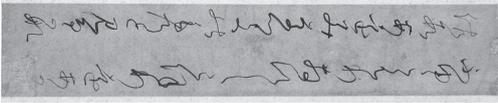
【図13】伝藤原行成筆采葉歌らし歌切



しちやまたひてふともしらぬみは二やぞなるらむいこそねられね

名ゆこもりそえこはりをわか  
きすあをみたきものどみるかな

【図14】伝紀貫之筆草かち未詳歌切



付記

本講演と同様の、あるいは重なる趣旨の文章を、少なからず書いています(講演もしています)。参考までにいさか奉げておきます。『古筆資料の発掘と研究』(青簡舎 二〇一四年九月刊)。『墨 いろは』から始めるかな』(二〇〇九年一月・二月号)所収「源氏物語」。『墨 かなで書く源氏物語』(二〇一九年一月・二月号)所収「源氏物語時代のかな」。『目の眼 源氏モノ語り』(二〇二〇年一月号)所収「古筆から知る源氏物語」。